

寄稿

医療・福祉現場で働く

聞こえない人たちの

声

-5-

理学療法士の元山歩葉あゆかです。現在は、主に高齢者を対象にしたリハビリ業務を病院で行なっています。18歳の時に失聴、両耳とも人工内耳を装着して9年目になります。人工内耳での聞こえは良く、静かな場所ですら一対一であれば円滑な会話が可能です。

院内での私の理学療法（PT）業務について紹介します。病院内ではマスク着用が義務です。PT室は何人も患者様が一緒にリハビリをするため、患者様との会話が聞き取れないことが多くあります。またリハビリ対象になる方は

失語症をはじめ、正常にはっきり発音できなくなる構音障害や声が枯れた状態になる嚁声させいがある方も多く、より一層聞き取りづらさを感じています。リハビリは基本的

人工内耳の装用でも

聞き辛い状況に理解を

に担当制なので初対面の際に私が難聴であることを伝え、はい/いいえで答えられるような質問をしたり、時間をずらしてPT室内が少人数時に実施する等の工夫により何とか業務が行えています。

カンファレンスや勉強会ではロジャー（ワイヤレスマイクと受信機のセット）の使用で不自由さはあまりありません。電話対応は外してもらっていますが、リハビリスタッフ間の範囲では電話を使う他、担当患者様のことで外部への電話連絡が必要になった際、スタッフにお願ひすることもあります。ただ、騒がしい病棟内やスタッフルームでは日頃の情報交換に必要な会話等が聞き取りにくいことが多いです。4月に現病院に転職した時、聴覚障害があることを全職員に伝えました。「音が聞こえていないのに言葉が聞き取りづらい」という状況を理解いただくのがなかなか難しいですが、焦らずに少しずつ理解を、と思っています。